

薬師寺休ヶ岡八幡宮の調査

—第475次

1 はじめに

平城第475次調査は、薬師寺休ヶ岡八幡宮の東側および西側における発掘調査である。防災設備設置工事にともない、八幡宮社殿の東側（以下、東区）と西側（以下、西区）の2カ所で調査をおこなった。

休ヶ岡八幡宮の創建は9世紀末と伝えられるが、平城京の地割でいえば、西区は右京七条二坊十六坪の北東部に、東区は九坪と十六坪との坪境小路付近にあたる。東区は薬師寺南門から南に約50mを隔てており、孫太郎稻荷神社のすぐ南側にあたる。西区は休ヶ岡八幡宮の社務所の南側である。

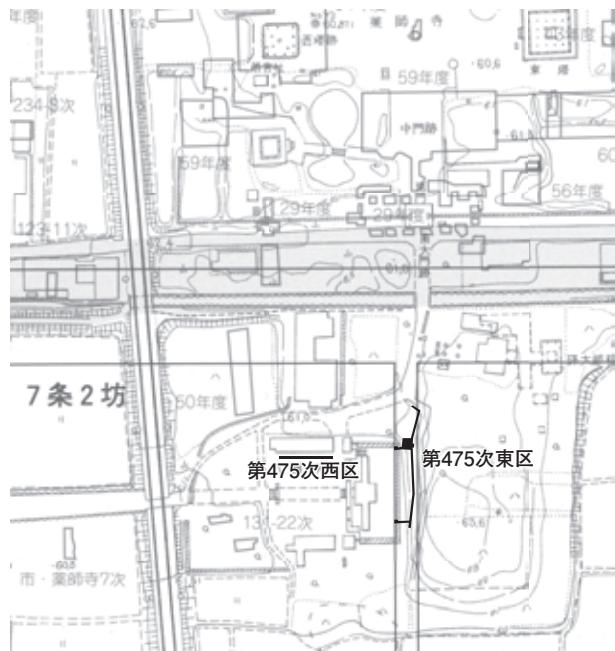


図248 第475次調査区位置図 1:2000

調査期間は、東区が2010年10月5日から同年11月2日、西区が同年12月1日から同年12月7日である。調査面積はあわせて41.4m²である。

2 遺構

東 区

休ヶ岡八幡宮の東側は雑木林および竹林であるが、社殿の側に切り通しをもつ南北の小道がある。この小道の開削時に最大で50cmほど掘り下げている関係で、路面には遺物包含層および地山がすでに露出した部分があり、このため路面の精査から調査を開始した。

本格的な発掘調査に先立ち、管路設置経路にしたがい3カ所で試掘調査をおこなった。管路北端付近の試掘1区（RE50地区）では、表土直下で地山（黄色砂礫層）を確認し、これよりやや南側で包含層が路面に露出していることが判明した。続いて試掘2区（RB51区）を掘削したところ、地山（白色シルト）の落ち込みとこれを埋める奈良時代包含層とを断面観察で確認した。また、管路南端付近の試掘3区（QP51区）では、厚い黒色土（現代遺物を含む）の直下で地山（白色シルト）を確認した。

試掘調査を経たのち、予定管路に沿い幅60cm、長さ約35.0mの狭長なトレンチを設け、北側から掘削をおこなった（図250）。調査面積は、試掘範囲をあわせて32.0m²。調査成果は次のとおりである。

X-147,843以北では小道の開削により、地山および奈良時代包含層が路面に露出している。また、X-147,843からX-147,840にかけては奈良時代包含層を掘り込んだ浅い土坑SK2967と、これを埋める赤褐色土層を検出した。赤褐色土は奈良時代の土器片のほか、瓦器・瓦質土器片を含み、中世以降の落ち込みであることを示している。

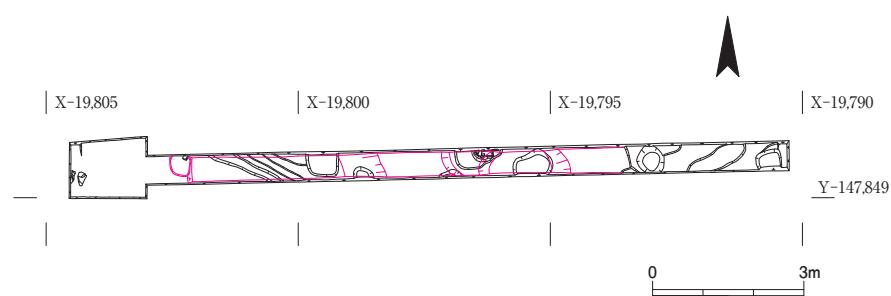


図249 第475次調査西区遺構平面図 1:150

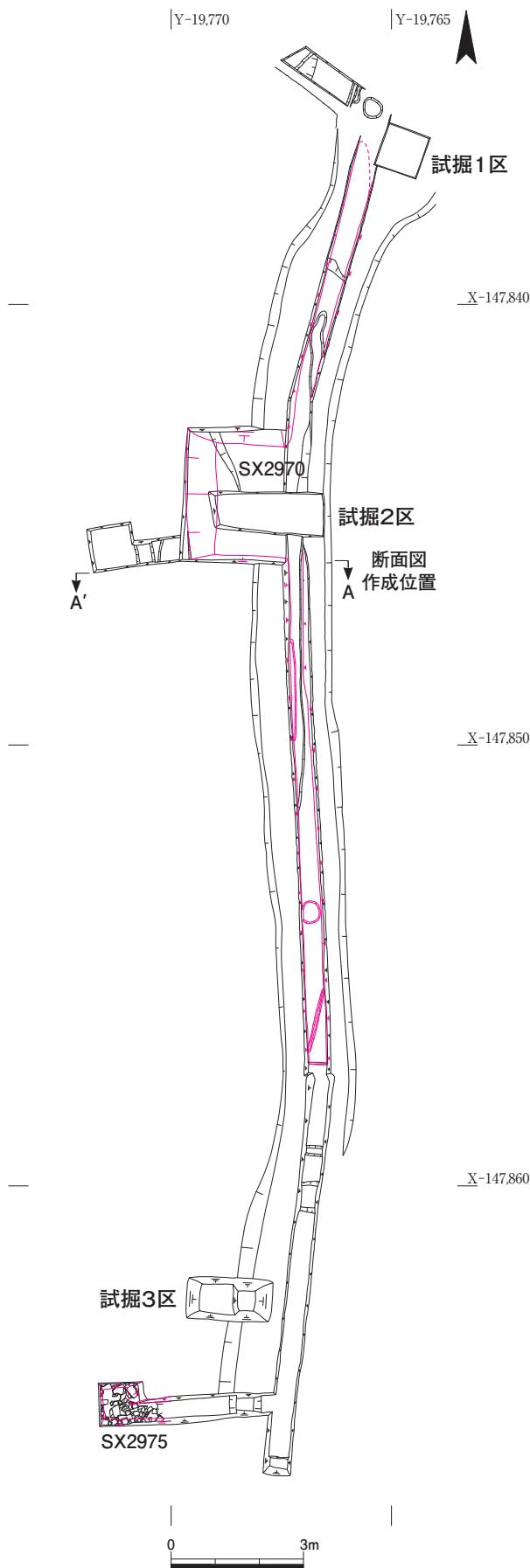


図250 第475次調査東区遺構平面図 1:150

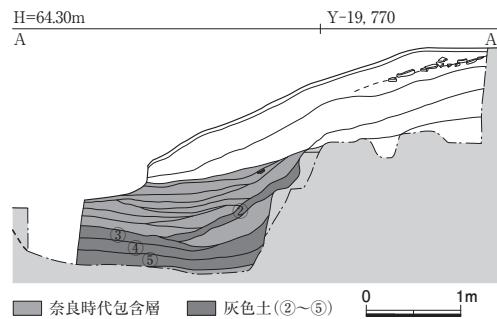


図251 SX2970土層断面図 1:80

X-147,845付近は防災設備（会所耕）の設置予定位置にあたるため、試掘2区をさらに拡張し、放水銃設置位置でも1m四方の坪掘りをおこなった。その結果、地山（白色シルトおよび橙色砂礫層）は八幡宮の社殿側（西側）で高く、現在の小道の部分で低くなることが判明した。地山はY-19,770付近で急激に東側へと落ち込んでいる。この段差SX2970は人為的に切り出されたものとみえ、地山の比高は最大で約1.5mにおよぶ。段差SX2970を埋めている土層は炭混土以下で8層以上に細分できる（図251）。これらの土層は西側で高く、現地形を反映した堆積状況をみせる。灰色土は上位から①～⑤に細分したが、褐色の砂礫層や木炭を多く含む黒色土が挟在する。

これらの土層は奈良時代前半の土師器・須恵器を多く含み、とくに灰色土④からの出土が多い。奈良時代包含層の上位には黄色土、褐色土が厚く堆積している。

X-147,846以南にも灰色土は分布するが、南に向かうにつれ土層が薄くなり、遺物も減少する。地山直上まで掘削をおこなったが、遺構は皆無である。

X-147,855以南では現代遺物を含む黒褐色土が厚く、これを除去すると地山（白色シルトまたは橙色砂礫）が露出する。奈良時代の遺物包含層は確認できず、遺構は皆無である。なお、放水銃設置位置で1m四方の掘削をおこなったところ、表土直下の褐色土中で室町時代の瓦堆積SX2975を確認した。

西 区

八幡宮社殿の西側では東西方向の狭長なトレンチを設定し、調査をおこなった（図249）。調査面積は9.4m²である。表土直下で現代の土坑4基を検出したほかは、明確な遺構は皆無である。地山の傾斜は、八幡宮の東側（東区）とは異なっており、東側が高く西側が低い。この傾斜は厚い整地層で埋められているが、その時期を特定することはできない。ともあれ、東区の調査成果を加味すると、地山は社殿付近で最も高いことがうかがわれる。

（森川 実）

3 出土遺物

瓦 磚 類

第475次調査では、東区・西区あわせて400Kgにおよぶ瓦磚類が出土している（表38）。このうち、東区南端の瓦堆積SX2975では、室町時代末～江戸時代前期の丸瓦・平瓦が多数出土している。

表38 第475次調査 出土瓦磚類集計表

| 軒丸瓦 | | 軒平瓦 | | 軒棧瓦 | |
|-------|----------|-----------|---------|------------|------|
| 型式 | 種 | 点数 | 型式 | 種 | 点数 |
| 6276 | ? | 1 | 6641 | Gb | 1 |
| 葉39 | 葉245 | | | 江戸 | 1 |
| 葉134 | 葉366 | | | | |
| 巴（鎌倉） | 平安 | | | | |
| 巴（室町） | 鎌倉 | 1 | | 軒棧瓦計 | 1 |
| 室町 | 室町 | 1 | | その他 | |
| 巴（中世） | 中世 | 2 | | 隅切平瓦（ヘラ書付） | 1 |
| 巴（中世） | 室町末～江戸前 | 3 | | 平瓦（刻印） | 2 |
| 中近世 | 江戸 | 3 | | 面戸瓦 | 12 |
| 巴（江戸） | | 6 | | 鬼瓦（江戸） | 4 |
| 巴（近世） | | 1 | | その他道具瓦 | 2 |
| 近代 | | 1 | | | |
| 時期不明 | | 1 | | | |
| 軒丸瓦計 | | 23 | 軒平瓦計 | | 25 |
| 丸瓦 | | 平瓦 | 磚 | | その他計 |
| 重量 | 99.133kg | 390.342kg | 3.437kg | 凝灰岩 | 21 |
| 点数 | 687 | 3575 | 7 | レンガ | 3 |

土 器

第475次調査では、東区・西区あわせて9箱の土器が出土した（図252）。このうち、東区の会所耕設置予定位置とその周辺では、SX2970を埋める遺物包含層（おもに灰色土と、これに挟在する間層）から、奈良時代前半の土器が出土している。以下、灰色土に掘り込んだ中世～現代の遺構から出土した奈良時代の土器も、本来は灰色土に含まれていたものとみなし、あわせて記載する。

1～13は土師器。杯A Iは b_1 手法で、内面に連弧+1段斜放射+螺旋暗文を施すもの（1・2）と、 a_0 手法のもの（3）からなる。杯C II（4）は内面に1段斜放射暗文を施すが、口縁部上半には暗文を施していない。 a_0 手法による。皿A I（5～8）は口縁部を軽く内側へと巻き込むタイプで、5・7・8は1段斜放射暗文を施している。6は暗文の有無を確認できないが、灯明器に用いたもの。高杯（9～11）はいずれも脚部が短く、脚部内面の下半をハケで、裾部外面をヨコナデで整えるもの（9）と、脚部内面を横方向のヘラケズリで整形し、裾部外面に4単位のヘラミガキを施すもの（10・11）がある。盤A（12・13）は外面にヘラミガキを施すもの。

12は内面に四重の螺旋暗文と、幾重にも重なる連弧暗文を施している。13も内面に螺旋暗文の一部が残る。これら以外には、図示しえないが壺A片があり、甕の破片や、製塩土器片も出土している。

14～33は須恵器。杯X（14～16）は丸味を帯びつつ立ち上がる口縁部と、狭い底部とが器形上の特徴で、内面には灰緑色の自然釉がかかる。15は内面に赤色顔料が付着する。杯Aには底部外面にヘラ切り痕を残す17と、ロクロケズリで整える18・26・31がある。18は復原口径がわずか6.1cmと小さい。31は底部外面に墨書「十」がある。杯Bには深いタイプ（29：杯B III-1）もあるが、浅いタイプ（杯B III-2：25・27・28・30）が多い。30も底部外面墨書「十」がある。杯B蓋は杯B IIIに見合うもの（20・21・23）と、杯B IVと一具をなすもの（口径約11cm：22）がある。21は低平な環状つまみを付す。21～23は転用硯である。

鉢B（19）は器高が直径を上回るコップ形をなし、断面逆台形の高台を付したもの。壺A蓋（32）の外面には自然釉がかかる。壺K（33）は内面にウルシが付着する。

34は三彩片。底部の中心には復原径約4cmの開口部があり、また残存する胴部には透かし孔の一部が残る。釉色は緑色と褐色で、残存部分では褐色釉が目立つ。X線回折分析では、石英およびムライトが検出されたものの、長石およびクリストバライトは検出されず、焼成温度は1100～1200°Cと推定された（降幡順子氏ご教示による）。器形はあきらかでないが、唐三彩の可能性がある。

以上の土器は、器種構成や土師器食器の暗文構成などから、平城宮土器IIに属すると考えられる。 （森川）

4 まとめ

平城第475次調査では、休ヶ岡八幡宮の創建（9世紀末）以前における土地利用の一端が判明した。奈良時代の遺構は、東区のRB51区を中心とする段差SX2970が唯一だが、これは休ヶ岡八幡宮の立地する微高地の東裾を階段状に開削したものである。今回の調査ではこの段差の全貌をあきらかにすることはできなかったが、灰色土から出土した土器が奈良時代前半のものであることから、奈良時代以前に地形改変をくわえたことがわかる。また、東西両区の成果から、八幡宮が自然地形の高所を選んでいることも判明した。 （森川）

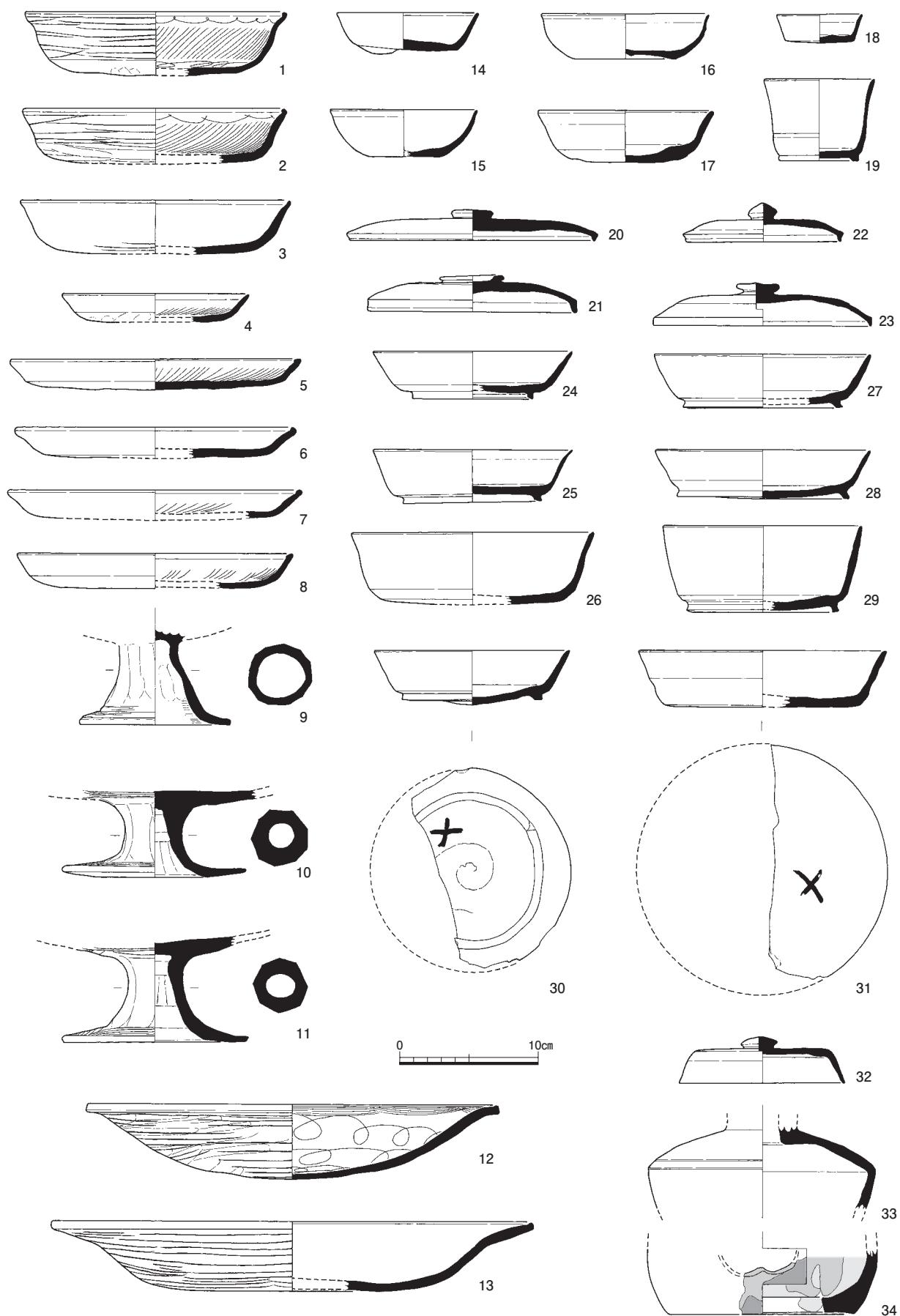


図252 第475次調査出土土器 1:4 (34のみ1:2)